

中国の雑豆事情(1) 生産と消費の動向

横浜国立大学 准教授 張馨元

1. 日本の菓子産業を支える中国産雑豆

2023年の日本の小豆輸入量は2万8,933トンである¹。そのうち、カナダからの輸入量が最も多く1万2,710トンであり、中国からの輸入量は1万1,639トンである。しかし、2023年に日本は海外から3万4,803トンの小豆加糖餡を輸入しており、そのうち中国からの輸入が3万3,882トンに達している²。輸入加糖餡の原料となる中国産小豆が約1万1,000トンであることを考えると³、日本が消費した中国産小豆の数量は、乾豆と加糖餡の原料を合わせて、年間およそ2万2600トンという計算になる。このように、中国は日本の小豆とその加工品の実需者にとって、最も重要な貿易相手国であるといえる。

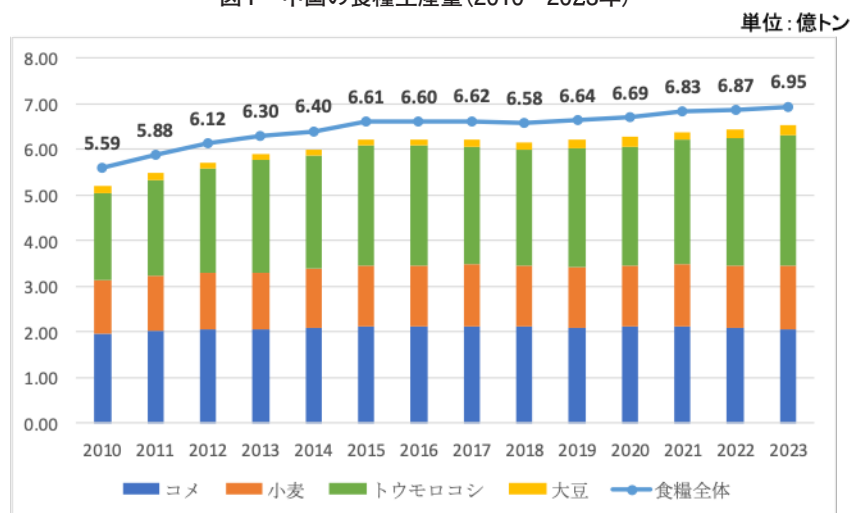
小豆のほか、緑豆やいんげんなどの雑豆も中国から輸入しており、日本の菓子や食品製造業の一部は、中国産雑豆に支えられてきた一面を持つ。本稿では、日本にとって重要な小豆供給国である中国の雑豆事情について、(1) 生産・消費、(2) 貿易の動向、の2回に分けて紹介する。この1回目の記事では、まず、中国の雑豆の定義を説明したうえで、2010年以降の食糧と雑豆の生産状況を紹介し、独自のアンケート調査の結果を用いて2022年時点の中国都市部における雑豆の消費動向を明らかにする。

中国の「雑豆」の定義は、日本の定義と異なり、雑豆は穀物に近い「食糧」として分類されている。ここでいう食糧（中国語「糧食」、*liangshi*）とはコメ、小麦、トウモロコシおよびそれ以外の雑穀、豆類、イモ類を含む概念である。食糧に含まれている豆類の中で、大豆以外の品目の総称は「雑豆」であり、代表的な品目として、緑豆、小豆、いんげん、そら豆などがある⁴。国家統計局が発表する農産物の生産統計において、雑豆に関しては緑豆と小豆の生産統計以外に見当たらない。この理由は、この2品目が計画経済期から輸出品目であるうえ、後述するように、中国で最もよく消費される雑豆だからである。

2. 雑豆を取り巻く食糧生産の状況

食糧生産、とりわけコメ、小麦、トウモロコシ、大豆といった「4大食糧作物」の生産情勢が、中国農業において中心的な位置を占めている。雑豆主産地の多くは、4大食糧作物、とりわけトウモロコシと大豆の主産地であるため、雑豆の生産と価格に関わる変化を理解するためには、食糧全体の生産状況を把握する必要がある。

図1 中国の食糧生産量(2010~2023年)



出所：国家統計局ウェブサイトの統計情報より、筆者作成。

図1に示されているように、2010年以降、中国の食糧生産量はおおむね緩やかな増加傾向にあり、4大食糧作物の合計生産量が食糧全体の9割以上を占める。2023年の食糧生産量は6億9,451万トンであり、そのうち、コメ、小麦、トウモロコシ、大豆の生産量はそれぞれ2億660万トン、1億3,695万トン、2億8,884万トン、2,084万トンである。コメと小麦の生産量が伸び悩んでいるのは、これらの2品目が主に主食として消費され、2010年代に入り、国内のコメと小麦に対する食用需要が頭打ちの状態に陥っているためである。それに対し、飼料需要が大きく、デンプンやアルコール、燃料用エタノールなどの原料となるトウモロコシ生産量の増産幅が大きい。2011~22年の間、トウモロコシの生産量が年平均して3.2%のペースで拡大している。

表1からわかるように、中国の豆類生産量に占める大豆の割合は約8割～9割である。2010年代前半では、大豆生産の収益性がトウモロコシに比べて低かったため、大豆生産量が伸び悩んだ。2017年以降、主産地で大豆生産者が対象の補助金制度が強化され、(2021年を除いて)大豆生産量が拡大傾向に転じている⁵。2023年に、中国の大豆生産量が1949年以降最大の2,084万トンに達し、豆類生産量(2,384万トン)に占める大豆の比率が87%となった。

表1 中国の豆類生産量と作付面積(2010～2023年)

年	生産量(万トン)						作付面積(万ha)					
	食糧合計	豆類	大豆	緑豆	小豆	その他雑豆	食糧合計	豆類	大豆	緑豆	小豆	その他雑豆
2010	55,911.3	1,871.8	1,541.0	74.7	22.0	234.2	11,169.5	1,105.3	870.0	66.4	14.5	154.4
2011	58,849.3	1,863.3	1,487.9	75.3	24.8	275.3	11,298.0	1,036.7	810.3	67.4	14.0	145.1
2012	61,222.6	1,680.6	1,343.6	66.6	19.3	251.2	11,436.8	940.5	740.5	58.9	11.5	129.6
2013	63,048.2	1,542.4	1,240.7	55.0	18.5	228.1	11,590.8	889.3	705.0	51.2	12.6	120.5
2014	63,964.8	1,564.5	1,268.6	49.8	19.0	227.1	11,745.5	882.4	709.8	43.7	12.8	116.1
2015	66,060.3	1,512.5	1,236.7	52.4	17.6	205.8	11,896.3	843.3	682.7	42.8	12.3	105.4
2016	66,043.5	1,650.7	1,359.6	56.5	27.5	207.1	11,923.0	928.7	759.9	43.7	18.1	107.1
2017	66,160.7	1,841.6	1,528.3	65.1	36.0	212.3	11,798.9	1,005.1	824.5	50.2	22.1	108.4
2018	65,789.2	1,920.3	1,596.7	68.1	27.8	227.7	11,703.8	1,018.6	841.3	48.5	18.2	110.6
2019	66,384.3	2,131.9	1,809.2	57.3	24.0	241.4	11,606.4	1,107.5	933.2	43.5	15.9	114.9
2020	66,949.2	2,287.5	1,960.2	50.8	20.8	255.7	11,676.8	1,159.3	988.3	38.4	13.7	119.0
2021	68,284.8	1,965.5	1,639.5	44.4	23.2	258.4	11,763.1	1,012.1	841.5	32.9	15.3	122.4
2022	68,652.8	2,351.0	2,028.0	38.9	24.7	259.4	11,763.1	1,187.8	1,024.4	27.4	15.6	120.4
2023	69,451.0	2,384.0	2,084.0	雑豆合計：300.0			11,896.9	1,199.4	1,046.6	雑豆合計：152.8		

注：その他雑豆は豆類から大豆、緑豆、小豆を除いた数字。
出所：国家統計局ウェブサイト、「中国農村統計年鑑」各年版より、筆者作成。

一方で、2023年の雑豆の生産量は300万トンである。これが同年の豆類生産量(2,384万トン)の約13%、食糧生産量(6億9,451万トン)の0.43%でしかない。中国農政の中心は食糧安全保障にかかわる4大食糧作物の生産と需給調整である。中国政府は、2004年から4大食糧作物の生産者に対し、直接補助金などの支援策を実施し、コメ、小麦、トウモロコシの貿易に関しては、計画経済期から国境措置を行っている⁶。それに対し、生産規模が極めて小さい各種雑豆は農政における重要性が低く、1980年代半ば以降、各種雑豆を対象とする全国範囲の生産支援政策または貿易制限が実施されたことがない。直近30年間では、4大食糧作物の場合と異なり、雑豆の生産、国内流通、そして輸出入はほぼ市場経済の下で行われている。このことが、小豆をはじめ中国産雑豆の生産量と貿易量が不安定で、価格変動が大きくなる原因の1つである。

3. 雑豆の生産状況

中国の豆類生産量は2011～15年の間、食糧全体の増加傾向とは異なり、縮小し続けた（表1）。豆類生産量が増加傾向に転じたのは2016年であり、この年に大豆、緑豆、小豆、その他雑豆の生産量はいずれも前年より増加している。作付面積をみると、食糧全体の作付面積の増加が2016年に止まり、翌年に減少傾向に転じた。それに対し、豆類の作付面積は2016年から増加傾向に転じ、大豆、緑豆、小豆、その他雑豆の栽培規模がいずれも前年より拡大している。

こうした変化が起きたのは、2016年に主産地において豆類の競合作物であるトウモロコシが、生産調整の対象となったことが主な原因といえる。中国政府は、2016年3月に生産者価格の引き上げ効果があるトウモロコシ臨時備蓄政策の廃止を公表し、同年からトウモロコシの作付面積を縮小させるための政策を実施し始めた。2016年にトウモロコシの生産者販売価格は前年の86%の水準に低下し⁷、主産地ではトウモロコシ生産に使われた土地と農業資源の一部が豆類の栽培にシフトし、大豆と雑豆の生産規模がともに拡大する結果となった。

2017年に中国政府は、主産地の大豆農家を対象に生産者補助金制度を強化し、大豆の作付面積が2017～22年の間、概ね拡大傾向にあった。一方で、雑豆は生産補助の対象ではない。表1からわかるように、2017年以降、緑豆の食糧作付面積は2010年代前半に比べて明らかに縮小傾向にある。小豆に関しては、2016～18年の間、作付面積が拡大し、豆類に占める割合が高くなったのは、前述したトウモロコシからの転作の影響と日本や韓国での安定した輸入需要があるためだと筆者は考えている。

雑豆の生産量を確認すると、2010年の330.9万トンから2015年に275.8万トンへ減少し、その後回復したものの、2018～22年の間、320万トン台で推移している。2022年の緑豆生産量は38.9万トンで前年より5.5万トン減少しており、小豆の生産量は前年より1.5万トン増え、24.7万トンである。

2023年の品目別生産量がまだ発表されていないが、国家統計局の速報値を用いて計算すると、各種雑豆の生産量が合計して300万トンであり、2022年から23万トン減少している。2023年の大豆生産量が拡大しているため、同じ主産地を持つ緑豆と小豆の生産量は2022年より減少している可能性が大きい。

4. 主産地の状況

中国では、緑豆と小豆を栽培している地域が多く、表2と表3からわかるように、2022年に緑豆が24の省（または自治区）、小豆が23の省（または自治区）で生産されている。この節では、緑豆と小豆の主産地について確認する。

緑豆に関しては、2019～22年の年平均生産量が上位3位の地域は、内モンゴル自治区、吉林省、安徽省である。2022年に、内モンゴル自治区、吉林省、安徽省の生産量がそれぞれ6.9万トン、6.5万トン、4.6万トンであり、合計して全国生産量の46%を占める。同年、生産量が2万トン以上の地域は、上記の3つ以外に、河南省、四川省、湖南省、重慶市、広西自治区もあげられる。生産量が第1位と第2位の内モンゴル自治区と吉林省は中国の東北部に位置しているため、東北部は緑豆生産の最重要地域といえる。

表2 中国各省の緑豆生産量(2019～2022年)

単位：千トン

地域・年	2019	2020	2021	2022	4年平均
全国合計	573.0	508.0	444.0	389.0	478.5
内モンゴル自治区	190.0	150.0	109.0	69.0	129.5
吉林省	56.0	60.0	63.0	65.0	61.0
安徽省	41.0	42.0	40.0	46.0	42.3
河南省	38.0	32.0	27.0	26.0	30.8
山西省	49.0	35.0	18.0	13.0	28.8
四川省	23.0	26.0	26.0	26.0	25.3
湖南省	24.0	23.0	24.0	23.0	23.5
重慶市	23.0	23.0	24.0	23.0	23.3
広西自治区	24.0	23.0	22.0	21.0	22.5
河北省	18.0	18.0	15.0	13.0	16.0
陝西省	9.0	9.0	14.0	13.0	11.3
黒竜江省	22.0	10.0	5.0	4.0	10.3
湖北省	8.0	10.0	11.0	10.0	9.8
江蘇省	9.0	8.0	8.0	6.0	7.8
遼寧省	9.0	8.0	9.0	4.0	7.5
雲南省	8.0	7.0	4.0	4.0	5.8
山東省	5.0	5.0	5.0	4.0	4.8
江西省	4.0	4.0	5.0	5.0	4.5
広東省	3.0	4.0	4.0	4.0	3.8
貴州省	3.0	4.0	4.0	3.0	3.5
福建省	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
甘肅省	3.0	2.0	2.0	1.0	2.0
海南省	0.0	0.0	1.0	1.0	0.5
新疆自治区		1.0	2.0	2.0	-
チベット自治区			1.0		-
天津市	0.0	0.0	0.0		-
北京市	0.0	0.0	0.0		-

出所：国家统计局ウェブサイト、『中国農村統計年鑑』各年版より、筆者作成。

注：1) 空欄は報告値のない年、0.0は生産量が100トン以下の年である。

2) 上海市、浙江省、青海省、寧夏自治区では全期間において生産が行われていない。

3) 4年平均生産量が高い順で示した。

表3 中国各省の小豆生産量(2019～2022年)

単位：千トン

地域・年	2019	2020	2021	2022	4年平均
全国総計	240.0	208.0	232.0	247.0	231.8
黒竜江省	95.0	71.0	96.0	109.0	92.8
内モンゴル自治区	25.0	20.0	22.0	27.0	23.5
陝西省	17.0	17.0	22.0	22.0	19.5
江蘇省	20.0	18.0	17.0	14.0	17.3
安徽省	10.0	10.0	10.0	11.0	10.3
吉林省	9.0	6.0	7.0	15.0	9.3
山西省	14.0	10.0	6.0	4.0	8.5
河北省	8.0	8.0	8.0	6.0	7.5
雲南省	9.0	10.0	5.0	4.0	7.0
甘肅省	6.0	6.0	5.0	3.0	5.0
湖北省	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
遼寧省	5.0	4.0	4.0	2.0	3.8
貴州省	3.0	3.0	3.0	4.0	3.3
四川省	2.0	3.0	3.0	4.0	3.0
重慶市	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
広東省	2.0	2.0	2.0	3.0	2.3
山東省	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
湖南省	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
海南省	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
福建省	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
広西自治区	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
江西省	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
河南省		7.0	5.0	5.0	-
新疆自治区		0.0	1.0		-
北京市	0.0	0.0	0.0		-
天津市	0.0	0.0	0.0		-

出所：国家統計局ウェブサイト、「中国農村統計年鑑」各年版より、筆者作成。

注：1) 空欄は報告値のない年、0.0は生産量が100トン以下の年である。

2) 上海市、浙江省、青海省、チベット自治区、寧夏自治区では全期間において生産が行われていない。

3) 4年平均生産量が高い順で示した。

表3に示されている小豆の省別生産量を確認すると、中国の小豆生産は緑豆以上に東北部に集中していることがわかる。まず、東北部の黒竜江省が小豆生産において最も重要な地域である。2022年に黒竜江省の生産量が10.9万トンで、全国生産量の44%を占めている。2019～22年の年平均生産量をもても、黒竜江省が第1位、内モンゴル自治区が第2位、同じく東北部の吉林省は第6位となっている。2022年に内モンゴル自治区と吉林省の生産量はそれぞれ2.7万トン、1.5万トンであり、黒竜江省の生産量と合わせると東北部の小豆生産量は全国の6割以上を占めている。同年に生産量が1万トンを超えた地域は、上記以外に、陝西省（2.2万トン）、江蘇省（1.4万トン）、安徽省（1.1万トン）がある。

近年の小豆主産地の変化について、以下の3点を補足したい。第1に、内モンゴル自治区では、近年において耕地面積が拡大し続け、人件費も比較的

安いため、土地資源と労働供給の面から判断して、小豆をはじめ各種雑豆の増産能力を有している地域であるといえる⁸。第2に、4年ぶりに生産量が1万トンを超えた吉林省は、生産地だけではなく、小豆の集散地としての役割も果たしている。同省の西北部に位置している白城地区の洮南市は中国有数の雑穀と雑豆の集散地であり、市内に多数の加工と卸売り業者が活動している。洮南市にある業者は、吉林産のもののみならず、黒竜江や内モンゴルで生産された豆類の取引も積極的に行っている。第3に、中国の西北部に位置している陝西省の生産量が近年拡大している点が注目値する。陝西省の小豆生産量は2010年に5,100トンであったが、14年に1.9万トンを超え、15年に一旦1万トンに減少したものの、2016～20年の間に1.6～1.7万トンの間で推移していた。2021～22年に同省の大豆、緑豆、小豆の生産量がいずれも2020年時点より多く、小豆に関しては生産量が2年連続で2.2万トンに達している。

5. 都市部の雑豆消費

本節では、2022年12月23～29日に北京、広州、成都の3都市で実施したオンラインアンケート調査の結果を用いて、中国の都市部における雑豆の消費状況を説明する。

この調査では、上記3つの都市に住む20～54歳の住民計900人から、雑豆の消費状況に関する回答を得た。まず、最もよく食べる雑豆の種類を1つ選択するという質問に対し、41%の回答者が緑豆を選択し、30%の回答者が小豆を選んだ。続いてえんどう9%、黒豆8%、そら豆5%、ひよこ豆3%という結果となっている。このように、都市部の家庭では、多様な雑豆が消費されている中で、最もよく消費されるものが緑豆で、その次に小豆であることがわかった。

表4 雑豆、小豆及び緑豆食品を食べる頻度(2020年以来)

頻度	パーセンテージ (%)		
	雑豆	緑豆食品	小豆食品
毎日	7.3	4.1	4.4
週に2-6回	56.1	38.7	42.1
週に1回	25.6	30.6	30.0
月に2-3回	9.2	19.1	16.4
月に1回	0.4	3.3	3.8
年に数回	1.3	3.8	2.6
2、3年に1回	—	0.4	0.7
合計	100.0	100.0	100.0

出所：アンケート調査の結果より筆者作成。
注：計900人の回答を集計して結果である。

表4には雑豆を食べる頻度に関する調査結果が示されている。雑豆を週1回以上食べる人は全体の89.0%で、緑豆と小豆の食品を週1回以上食べる人はそれぞれ全体の73.3%、76.6%を占める。このことから、緑豆と小豆は日常的によく消費されている雑豆であることがわかる。

また、雑豆を食べるタイミングに関する質問では、1) 朝食、2) 昼食、3) 夕食、4) 三食以外の飲み物、スナック菓子、デザートという4つの選択肢を設け、複数選択可で回答してもらった。900人の回答を集計すると、朝食と答えた人が最も多く、全体の53.9%で、昼食、夕食で食べると答えた人はそれぞれ全体の35.4%と50.2%となった。三食以外の飲み物、スナック菓子、デザートとして雑豆を食べる人も全体の36.3%である。

日本では、小豆が和菓子などに入る餡子の原料として食べられることが多いため、朝食で小豆や緑豆を食べることが日本の読者にとって想像しにくいかもしれない。しかし、実際、中国各地では、小豆、緑豆、アワ、高粱など多様な雑豆と雑穀が入ったごはんやおかゆ、甘さを抑えた小豆餡で作る饅頭や揚げパンなど（中国語「豆沙包」、「紅豆餅」）が朝食のみならず、三食の主食としてよく食べられている。

表5 小豆と緑豆の食べ方(2020～2022年)

(1) 小豆

食べ方	回 答 数			
	小計	北京	広州	成都
主食	312	133	80	99
おかず	25	8	6	11
スナック菓子	52	18	17	17
飲料	128	44	36	48
伝統菓子	155	44	50	61
デザート	212	48	105	59
その他	16	5	6	5
合計	900	300	300	300

(2) 緑豆

食べ方	回 答 数			
	小計	北京	広州	成都
主食	195	74	46	75
おかず	34	10	9	15
スナック菓子	69	20	25	24
飲料	217	78	59	80
伝統菓子	153	56	57	40
デザート	213	54	98	61
その他	19	8	6	5
合計	900	300	300	300

出所：アンケート調査の結果より。

この点について、表5にまとめられている「2020～22年に最もよく食べる小豆または緑豆の食品は何か」という質問に対する回答からも確認できる。小豆の食べ方に関し、デザートと伝統菓子と回答した人はそれぞれ23.6%と17.2%であるが、小豆を主食の一部として食べると回答した人が最も多く、全体の34.7%を占める。また、小豆飲料を最もよく消費する人が全体の14.2%を占める点も興味深い。中国では、小豆飲料は甘みが強い小豆ミルクや小豆ミルクティー以外に、近年ではハトムギと小豆と一緒に煮込んだ薬膳スープが人気で、「小豆ハトムギドリンク」（中国語「紅豆薏仁水」）も販売されている。

緑豆の食べ方に関しては、夏に暑気を払うための「緑豆湯」をはじめとする飲料が最も人気であり、回答者の24.1%が緑豆を飲料として最もよく消費すると答えている。緑豆アイスなどのデザート、おかゆや緑豆ごはんなどの主食、緑豆餡が入った伝統菓子を選んだ人もそれぞれ全体の23.7%、21.7%と17.0%を占める。

このように、主食や飲料の製造に関わる小豆と緑豆の需要も多く、多様な消費方式の存在は、中国における雑豆消費の規模拡大を支える要因の1つであるといえる。

6. まとめ

本稿で説明した生産と消費状況をまとめると、以下の3点が、今後、日本の実需者が中国から雑豆を調達する際に、特に重要だと思われる。第1に、主産地では、小豆や緑豆にとって競合作物が多く、主要食糧作物のトウモロコシと大豆のほか、他の雑穀と雑豆とも競合関係にある点である。農家は基本的に収益性が高く、販売しやすいと予想する作物を栽培するので、直接補助と価格安定政策の対象ではない雑豆生産は、基本的に不利な立場であると考えられる。第2に、雑豆の流通と貿易が完全に市場経済の下で行われるため、供給量と取引価格が常に変動している点である。農村部では、卸売り業者は出来秋に緑豆や小豆を買付したあと、保管しながら価格が高い時期を見計らって販売する、という投機的な行動もよく見られる。最後に、中国では、小豆は嗜好品のみならず、主食や飲料にも多く利用される食材である。主産地では小豆の生産と消費の歴史が長く、多様な需要が存在する限り、各地の小豆生産はなくなるであろう。

2023年末以降、中国の東北部ではトウモロコシの庭先価格が前年より低下

している⁹。このことは、2024年の豆類の栽培規模拡大にとって好材料であり、筆者は、大豆や他の雑豆と競合しつつ、小豆と緑豆の生産規模が今後どのように変化するかを引き続き観察するつもりである。

脚注

- [1] 本稿の内容は、公益財団法人日本豆類協会よりの令和4年度受託研究「中国の雑豆需給と対外貿易の近年の変動と今後の展望」の一部成果であり、張馨元（2024a）を参照している。
- [2] 本稿では、断らない限り、日本の貿易統計は「財務省貿易統計」（<https://www.customs.go.jp/toukei/srch/index.htm>）、中国の農業統計は国家統計局ウェブサイト（<https://data.stats.gov.cn/index.htm>）による。
- [3] 加糖餡と缶詰餡の換算比率は、渡辺篤二（2000：83）の並餡製造配合に基づき概算した。
- [4] なお、野菜として食される莢いんげんやグリーンピース、そして油糧作物としてみなされる落花生などは、豆類の作物であるが、雑豆に含まれない。中国でいう雑豆とは、あくまでも「食糧」として生産される大豆以外の豆類である。
- [5] 2010年代以降の大豆の生産と貿易について、張（2024b）に詳しい。
- [6] 近年の中国農政の変化と「天津系」、「東北系」小豆の生産と貿易状況については、田島（2024）を参照されたい。
- [7] 『中国農産品価格調査年鑑』2021年版の「全国分品種農産品生産者価格指数」。
- [8] 内モンゴル自治区と黒竜江省における雑豆の生産状況については、晁剛（2024）を参照されたい。
- [9] 2024年1月、筆者の聞き取り調査。

参考文献

- 晁剛（2024）「中国の雑豆主産地における生産と流通——黒竜江省と内モンゴル自治区を中心に」『エコノミア』第74巻第2号、53-70頁
- 国家統計局農村社会経済調査司編『中国農産品価格調査年鑑』各年版、中国統計出版社（中国語）
- 国家統計局農村社会経済調査司編『中国農村統計年鑑』各年版、中国統計出版社（中国語）
- 田島俊雄（2024）「中国における農業保護の位相と雑豆産地の立地変動」『エコノミア』第74巻第2号、5-32頁
- 張馨元（2024a）「中国の雑豆需給構造——2010年以降の状況を中心に」『エコノミア』第74巻第2号、33-52頁
- 張馨元（2024b）「中所得段階における中国の大豆需給」張・八木・林編著『大豆の政治経済学——フードレジームの視点から』筑波書房、所収（近刊）
- 渡辺篤二（2000）『豆類の事典——その加工と利用』幸書房